Osaka University Knowledge Archive

Title	不確実な世界に生きる難民の人類学的研究　――北インド・ダラムサラにおけるチベット難民サンジョルの社会的、経済的実践を事例として
Author(s)	片, 雪蘭
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/72465
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　片　　雪蘭　　）	
論文題名	不確実な世界に生きる難民の人類学的研究 ―北インド・ダラムサラにおけるチベット難民サンジョルの社会的、経済的実践を事例として

論文内容の要旨

本稿は、北インド・ダラムサラ（Dharamsala）におけるチベット難民、特にサンジョル（*gsar 'byor*、「新しく来た者」の意）と呼ばれる人々に注目し、不確実性に満ちた難民という生の営みを社会的かつ経済的な実践から論じることを目的とする。筆者は、具体的に二つの点に注目しながら議論を進めていきたい。第一に、サンジョルの仲間関係における日々の助け合や「負債」を介して構築される社会的ネットワークのあり方である。頼れる家族や親戚がインドにいない彼らにとって、ダラムサラで新しく構築される社会的ネットワークは生活をするにあたって唯一な資源となる。サンジョルたちが個々人のネットワークを構築、維持するためにどのような実践を共有しているのかを明らかにしたい。第二に、サンジョルの経済実践における「賭け」の様相である。サンジョルは、難民学校を卒業することになると彼らは自力で生活しなくてはならない。無国籍者としては安定した仕事に就くことも難しいため、サンジョルは仲間たちとともに商売をすることで生計を立てていく。経済的な不確実性のなかで、計画的に生をやりくりすることは難しい。状況は常に変化し、サンジョルはその場その場の状況に自分を合わせるしかない。サンジョルの経済実践のあり方を分析することによって、「賭け」の様相を明らかにしたい。

本稿は二部構成である。第一章の序論では、サンジョルが「難民」という生をいかに生き抜けているのかを明らかにするため、二つの視点を取り入れる。第一に、難民研究とチベット難民研究の先行研究を整理する。特に、他者とのつながりのなかで構築されていく難民の行為主体性に注目する。第二に、不確実性についてこれまでの人類学研究がどのように捉えてきたのかを整理し、本稿において「不確実性」とは、否定的な側面と肯定的な側面を両方とも持つ概念と定義する。

続く第二章では、調査地概要と調査対象のサンジョルについて説明する。すなわち、本稿の舞台となるダラムサラがチベット難民社会の中心地となった歴史的経緯を明らかにし、サンジョルがチベット難民社会のなかでどのような位置付けにあるのかを説明する。さらに、ダラムサラは、「シチャの世界」と「サンジョルの世界」が共存している空間として描く。

第三章では、ダラムサラの著しい移動性を描く。特に、サンジョルがダラムサラに来た動機とその場を去るまでの一連のフローを描き、サンジョルがオジェの述べる「場所」と「非場所」のはざまに生きている論じる。ダラムサラはサンジョルにとって越境前から、希望に溢れた場所であったものの、生活をしていくうちに「行き詰まり」を感じるようになる。多くの人々がダラムサラを行き去り、ダラムサラを「インターナショナル・エアポート」と呼ぶのである。それでも、ダラムサラから出なかった（もしくは、出られなかった）サンジョルたちはなんとか生きていかねばならない。第四章から描くサンジョルの生き方は、ダラムサラで生きていくための「戦術」であるといえよう。

第四章では、サンジョルの社会的ネットワークが構築されていくあり方を、日々の日常における共住や共食、助け合いなどの「関わり合い」を通して見ていく。各々の出身地により強い帰属意識を持っているサンジョルたちは、「同郷の者」とネットワークを築く。その他方で、地域主義という集団範疇だけではサンジョルを静態的にのみ捉えることになる。したがって、日々の共住や共食、助け合いといった反復行為の実践を事例としながら、常に構築されていくサンジョルの社会的ネットワークを描く。

第五章では、第四章の延長線として、サンジョルのネットワークが電子貨幣を介することによって、ダラムサラにとどまらず、チベットもしくは海外へ空間的に拡散されていく様子を描く。その際、インターネット上における電子貨幣のやりとりを事例に、サンジョルたちは絶え間なく負債（負い目）を連鎖することでネットワークが維持できるのだと主張する。

最後の第六章では、これまで説明してきたサンジョルの社会的ネットワークが、空間的に拡散されていくことによって始まった新たな経済実践の過程を描く。また、経済的に不確実なダラムサラにおいて、サンジョルが仲間たちと「チャムチャム（ぶらぶら）」の行為によって、短期的に「賭け」続ける生の営みを論じる。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　片雪蘭　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	中川敏
	副 査	教授	白川千尋
	副 査	教授	栗本英世
	副 査	准教授	森田敦郎

論文審査の結果の要旨

博士論文では、北インド・ダラムサラ、におけるチベット難民、特にサンジョル、「新しく来た者」の意）と呼ばれる人々に注目し、不確実性に満ちた難民という生の営みを社会的かつ経済的な実践から論じることを目的とした。筆者は、具体的に二つの点に注目しながら議論を進めた。第一に、サンジョルの仲間関係における日々の助け合や「負債」を介して構築される社会的ネットワークのあり方である。頼れる家族や親戚がインドにいない彼らにとって、ダラムサラで新しく構築される社会的ネットワークは生活をするにあたって唯一な資源となる。サンジョルたちが個々人のネットワークを構築、維持するためにどのような実践を共有しているのかを明らかにした。第二に、サンジョルの経済実践における「賭け」の様相である。サンジョルは、難民学校を卒業することになると彼らは自力で生活しなくてはならない。彼らは安定した仕事に就くことが難しいため、仲間たちとともに商売をすることで生計を立てていく。経済的な不確実性のなかで、計画的に生をやりくりすることは難しい。状況は常に変化し、サンジョルはその場その場の状況に自分を合わせるしかない。サンジョルの経済実践のあり方を分析することによって、「賭け」の様相を明らかにした。

序論では、難民に関する人類学の先行研究を整理し、他者とのつながりのなかで構築されていく難民の行為主体性に注目する。また「不確実性」についての議論を整理し、「不確実性」とは否定的な側面と肯定的な側面を両方とも持つ概念と定義する。続く第二章では、調査地概要と調査対象のサンジョルについて説明する。

第三章では、サンジョルの著しい移動性を描く。サンジョルがダラムサラに来た動機とその場を去るまでの一連のフローを描き、サンジョルがオジェの述べる「場所」と「非場所」のはざまに生きていると論じる。第四章では、サンジョルの社会的ネットワークが構築されていくあり方を、日々の日常における共住や共食、助け合いなどの「関わり合い」を通して見ていく。第五章では、サンジョルのネットワークが電子貨幣を介することによって、ダラムサラにとどまらず、チベットもしくは海外へ空間的に拡散されていく様子を描く。最後の第六章では、これまで説明してきたサンジョルの社会的ネットワークが、空間的に拡散されていくことによって始まった新たな経済実践の過程を描く。ダラムサラで製作されるチベット伝統薬や数珠などがチベット本土へ流通されるあり方を描いた。また、経済的に不確実なダラムサラにおいて、サンジョルが仲間たちとする「チャムチャム（ぶらぶら）」の行為によって、短期的に「賭け」続ける生の営みを論じる。

調査は緻密であり、論文の構成は厳格である。本論文は博士（人間科学）の学位論文として十分価値あるものと認める。